

本学における防災・減災教育の取り組み（その7）

— 災害・緊急時の専門力・人間力の育成 —

布施 千草¹ 根本 曜子¹ 山田美知代¹ 清宮 宏臣¹
時田 猛² 三野宮純一² 平井 敏一² 山口 温子²

The Action of the Disaster Prevention Education in the Uekusa Gakuen Junior College (Vol.7): To Enhance the Expert Knowledge and Ability in the Natural Disaster

FUSE Chigusa NEMOTO Yohko YAMADA Michiyo SEIMIYA Hiroomi
TOKITA Takeshi SANNOMIYA Jun-ichi HIRAI Toshikazu YAMAGUCHI Atsuko

本学では平成23年から繰り返される大災害にその都度被災地支援を行ってきた。「災害・緊急時の専門力・人間力の育成」をテーマに取り組んできた。平成27年度は千葉市との共同研究で拠点福祉避難所運営訓練を実施し、平成28年度は2回目の訓練を実施した中で、教育的課題が生じた。これに対し29年度体験的に学ぶプログラムによって学生たちは要配慮者である障害のある方に対し、理解が深まった。この経緯を踏まえて30年度は3回目の訓練が行われた。今年度は全学的に取り組むことを前提に短大特別支援教育専攻、大学保健医療学部の学生も動員して行われた。そこから全学的に取り組む体制、要配慮者により実践的な支援の検討、いかに学生の主体性を引き出すか、いかにリアルな設定をするかなど新たな課題が浮かび上がってきた。

キーワード：拠点福祉避難所、要配慮者への対応、体験的学び、全学的取り組み

1. はじめに

本学は平成23年の東北地方太平洋沖地震以前の平成19年の新潟県中越沖地震以来、被災地の復興支援に取り組んできた。その中で災害弱者への対応の課題を踏まえ、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」助成を得て、平成24年度から同26年度まで、「産学協働による学生の社会的・職業的自立を促す教育開発」に取り組んだ。「災害・緊急時の専門力・人間力の育成」をテーマに、地域介護福祉専攻に科目「災害と緊急時の介護」を必修化し、被災地ボランティアを継続させ、災害・緊急時の専門力・人間力を育成するためのカリキュラムイメージの策定、授業等での避難所運営ゲーム（HUG）の導入などの取り組みを行ってきた。

また、平成26年度に千葉市より本学を災害時の

「拠点福祉避難所」とする打診があり、平成27年度に千葉市と共同研究として、拠点福祉避難所運営訓練が行われた。教職員、学生、千葉市担当者のもとより、地域住民、障害者団体等に呼びかけ参加を募った。これを含め2度に渡る訓練が行われ、平成29年度拠点福祉避難所の指定を受けた。

一方で運営訓練の中で新たな教育的課題が浮かび上がった。日頃から要配慮者への関わりについての学習環境を整え、その専門性を高める必要性を感じた。そこで平成29年度は拠点福祉避難所運営訓練に代わり、障害のある方の理解・支援を体験的に学ぶ教育内容を取り入れた。

その上で今年度の拠点福祉避難所運営訓練が行われた。参加者は今までの担当者、参加者に加え、若葉区災害担当者、全学的取り組みとして地域介護福祉専攻、専攻科特別支援教育専攻、介護福祉専攻

1 植草学園短期大学

2 植草学園総務課

植草学園大学理学療法学科の2年生と教員が参加した。また昨年に引き続き、学生のボランティア活動等も行われた。

2. 倫理的配慮

本研究倫理に則り、写真についてはあらかじめ許可を取り、個人が特定されないように配慮した。

3. 本共同研究の概要

昨年より取り組まれた学生の体験的学びがどのように拠点福祉避難所運営に効果が出たか、また、3回目となる運営訓練によって新たな課題はどのようなものかを明らかにしていくものである。まず、本年度取り組まれた教育プログラムについて述べる。

3-1 千葉県視覚障害者福祉協会ボウリング大会ボランティア（以下、千視協）

千視協では年間を通し、県内在住の視覚障害のある方に対してさまざまな行事と支援を行っている。その中から毎年行われているボウリング大会に昨年に引き続き本学1年生がボランティアとして参加した。千視協スタッフも参加者も昨年の経験からボランティア学生との触れ合いを楽しみにしていた。本学学生25名、視覚障害のある方26名、引率教職員3名と千視協スタッフと同行援護者が参加した。昨年は学生数が15名だったので、軽度の視覚障害者にはボランティア学生が付くことができなかったが、本年度は25人でほとんどの方にボランティア学生が付くことができたことで、軽度の方がとても喜ばれた。学生の感想からは「視覚障害者の方たちが明るく話しかけてくれて緊張が解けた」「同行援護の方からも教えてもらった」「介助の仕方が上手にできると褒めていただけて自信になった」「毎年続けていることで人間関係が築けている」ボウリング場もボウリングも初めての学生がいる中で参加者が積極的に関わっている様子も見取れた。これはボランティアを続けてきたことの意義と言えよう。また、千視協の参加者の力によるものが大きいと言える。「素直にボランティアとしてのやりがいを感じた。こうした経験が実際の介護の場で活かされると思った」などの感想が寄せられた（写真1、写真2）。



写真1 ボウリング大会1



写真2 ボウリング大会2

3-2 緑栄祭での展示

緑栄祭の前日に地域介護福祉専攻1年生25名は、本学の災害・防災に関する取り組みの目的、10月31日に実施した拠点福祉避難所運営訓練の様子を文章化し、そこに写真を貼り、15枚のパネルを作成した（写真3）。



写真3 緑栄祭展示1

当日は、L棟の多目的演習室にパネルを展示するとともに来場者が体験できるように体験コーナーを設けた。実際に使用した段ボールベッド、プライバシーを守るためのパーテーション・テントの中に設置した仮設トイレやアルファ米などの食品も展示した(写真4)。また来場者が休憩できるスペースを作り、そこで福祉避難所運営訓練の様子や千葉県の震災時のDVDを放映し、見てもらうことにした。121名の来場者があり、来場者の質問には時間毎に配置した学生が対応した。来場者からは、「どのような備品があるのか」「福祉避難所とは、どういうところなのか」等質問があったが、答えに困る場面もあった。教員・職員だけでなく学生へも日頃から本学の防災用備蓄品や利用できる機材一覧・所在を周知する必要がある。体験した来場者からは「段ボールベッドは意外に丈夫ですね」「プライバシーを守るのは大切ですね」という声がきかれた。学生からは、「緑栄祭で展示をしたことは一般の方に福祉避難所を知ってもらうよい機会になった」「体験をしたことで防災に対する意識が高まったのではないか」等意見がきかれた。



写真4 緑栄祭展示2

3-3 避難所運営ゲーム (HUG) の実施

HUGとは、H inanzo (避難所)、U nei (運営)、G ame (ゲーム) の頭文字を取ったもので、避難所運営を皆で考えるための防災ゲームとして平成19年に静岡県が開発した。このゲームは、避難者の属性を考慮しながら部屋割りを考え、また炊き出し場や仮設トイレの配置などの生活空間の確保、視察や取材対応といった出来事に対して、自由に意見を述べ

かつ話し合いながらゲーム感覚で避難所の運営を学ぶことができる。

本学では平成25年度から地域介護福祉専攻の学生にHUG研修を実施してきた。今年度は、11月14日に千葉県生涯大学校京葉学園の地域活動専攻科の19名の学生と本学の地域介護福祉専攻1年25名、さらに千葉市若葉区役所職員4名が加わり計48名で実施した。区役所職員の方々は、指定避難所の開設時には各避難所に配置されるため、基本的な対応や支援を身につける必要性があり共に学ぶことになった(写真5)。

地域防災インストラクターである深味肇講師から「災害発生直後の避難行動について」「避難所運営の開設方法」「運営委員の役割・問題点」等の解説、またHUGの役割・手順についての説明後にゲームを開始した。48名を7班に編制し、各班に配置した本学教員がそれぞれにカードを読み上げ、班ごとに検討・処理する形式で実施した(写真6)。生涯大



写真5 HUG 1



写真6 HUG 2

学校の学生からは、「避難所ありきではなく、先ずは自助努力の重要性に気づかされた」「地域の防災対策の方法も再考していく必要性を感じた」「団地、町内会など地域でもHUG研修を実施していきたい」という意見が聞かれた。本学の学生からは、「運営委員は、避難住民やボランティアなど人を動かすことが鍵となり、多くの情報から冷静に判断し対応していかなければならない」「多世代の方々と話し合いをする中、色々な考えがあると理解した半面、意見がまとまらずイライラすることもあった」「少人数でも意見をまとめるには時間がかかったことから、実際の場面ではより混乱することが予想される」「最初にルールを決めておくことが重要である」等意見が聞かれた。

今回のHUG研修は、本学の学生は10月31日に実施した拠点福祉避難所運営訓練を体験した直後であり、机上といえどもより現実感があつた。深味肇講師より避難所運営に関しての解説や各班からの疑問に答えていただいたことで、避難所運営についての理解を深めることができた。今後もHUG研修を継続することで、防災減災への意識をいっそう高めることができると思われる。

4. 本年度の拠点福祉避難所の運営訓練の実際

4-1 運営訓練の全体像

今回の拠点福祉避難所運営訓練（以下、運営訓練）では、これまでの訓練では実施したことがない、避難所開設要請にかかわる諸連絡のやりとりを、運営訓練前日に実施した。発災後しばらくは電話がつながりにくいことが予測されるため、メールにて千葉市関係者と本学とで訓練連絡を取り合った。

運営訓練は2018（平成30）年10月31日（水）、9時から14時15分（拠点福祉避難所閉所まで。片づけを除く）の5時間程で、本学B棟を避難生活場所

として設定し行った。

本学の図書館（M棟）を一次避難所と仮定し、避難者として参加する要配慮者の方々（以下、要配慮避難者）が各自で本学図書館に集合し、待機をしてもらった^{注1)}。

見学者も含め訓練に参加した人数は180名程であり、参加者の概要は、以下の通りである。

【要配慮避難者（保護者、施設職員含）；35名】

- ・身体障害者；12名（肢体不自由6、視覚3、聴覚3）
- ・知的障害者；8名（および保護者8名）
- ・認知症高齢者；3名（および施設職員介助者4名）

【本学学生；87名】

- ・短大 地域介護福祉専攻1年生；25名
- ・短大 地域介護福祉専攻2年生；13名
- ・短大 専攻科介護福祉専攻生；1名
- ・短大 専攻科特別支援教育専攻生；3名
- ・大学 保健医療学部理学療法学科2年生；45名

【本学教職員；30名程】

【そのほか、見学者など；30名程】

派遣手話通訳者、千葉市関係者、地域住民の方など。

4-2 想定状況

前回（平成28年度）の訓練同様、東北地方太平洋沖地震規模の地震が発生したと想定。千葉市から拠点福祉避難所の開設要請を受けた翌日に、避難所を立ち上げ、12時過ぎ頃に昼食を食べることを目標に、午前中に受け入れ体勢を整える。ガス以外のライフラインは使用可能とした。調理については、調理実習室および野外で薪を使用して実施した^{注2)}。

4-3 運営訓練の概要

運営訓練の時間や流れについては、前回の運営訓練と概ね同様である^{注3)}。実施する内容を時間に沿って大まかに箇条書きにて記す。

注1）実際の災害時では、要配慮避難者は一次避難所（指定された小学校や公民館など）から福祉避難所に移送されてくる。なお、運営訓練時への障害者団体への参加協力や訓練当日の一次避難所と想定した場所での受付対応などは、前回の運営訓練同様に、千葉市保健福祉局高齢障害部障害者自立支援課のご協力をいただいた。

注2）前回の運営訓練同様、不測の事態に備え、調理実習室のガスも使用できる状態で準備をしていた。

注3）当日の様子については、前回の訓練と概ね同じ取り組み、流れとなっておりが多い。詳細は清宮ほか（2017）「本学における防災・減災教育の取り組み（その5）―災害・緊急時の専門力・人間力の育成―」『植草学園短期大学紀要第18号』17-28.を参照のこと。

- ・ 9:00; 本部班ほか各班の教職員、学生が集合。
- ・ 9:15; 避難所開設宣言の後、各班に分かれて準備を行う。
- ・ 10:30; 要配慮避難者の受け入れ。一次避難所と仮定した本学図書館に集合している要配慮避難者を本学中庭に設置したテントまで誘導し受付をする。受付後は、避難生活場所として居室づくりが完了した各講義室（以下、居室）へ誘導する。
- ・ 各居室到着後、バイタルチェック実施（各居室担当の理学療法学科の学生が担当）。
- ・ その後しばらくは、自由に過ごしてもらう。必要に応じてアクティビティ活動支援を実施。
- ・ 12:15; 昼食。その後、バイタルチェックや必要に応じてアクティビティ活動支援を実施。
- ・ 14:00; 閉所式。
- ・ 14:15; 要配慮避難者帰宅。
- ・ 15:30; 学生と教職員とで片付けを行い、16:00; 終了。

5. 訓練当日の様子

5-1 開設準備の様子

本学中庭に各班が使用するテントを以下の通り設営した。

- ・ 本部班（1張）
- ・ 受付テント（1張）
- ・ 食料物資班（2張）
- ・ 保健衛生班（1張）
- ・ 施設管理班（物品等置き場）（1張）

幸い天候も良く、人の数も多くいたことからテント設営は滞りなくできた。また、前日にテントを倉庫から搬出しておいたことも速やかに設営できた一因でもある。訓練では事前準備を含め、人の手が多くあるため比較的速やかにテント設営ができたが、実際の災害時にどのくらいの人の確保と事前準備ができるのか、また天候によってテントの設営も今回ほど速やかにはいかないことだろう。

5-2 「総務班」による受付

1) 避難者カード

「避難者カード」は、前回も特別に不都合はなかったため、同様の内容と取り扱いにした。今回も受付時においては特に問題は見当たらなかった。

このカードは要配慮避難者にかかわる情報が記載されている大変重要なものである。実際の災害時において、数日間続く避難所生活を支援していくために、受付時の一時点のみの情報だけでなく、必要に応じて支援者が気づいた情報を随時追加して、情報共有できるものにしていかなくてはならない。

2) 受付での様子

受付では、要配慮避難者の氏名の確認や名札を手渡すなどをした。多少時間を要する場面も見られたが、大きな混乱もなく受付対応することができた。

今回気づいたことの1つに、前回の訓練にも参加をしてくださった知的に障害のある方が、今回の参加において、受付を通ることなく直接居室に行く様子が見受けられた。同行していた保護者の方曰く、「前回、訓練参加した記憶があって、その部屋に行きたいみたいです」とのことだった。本学の環境に慣れ親しんでくれていたことをうれしく思うと同時に、このような行動をとること、手順通りにいかないことを改めて気付かされた。

今後に気をつけておきたいこととして、氏名の間違い（名簿と名札の漢字の違い）があった。また、受付場所がわかるように受付テントに掲示していた要配慮避難者の氏名札に関して、受付を終えたと同時にはがしてしまっていた。受付が無事終了したことを確認する意味合いで掲示の氏名札をはがしてしまっていたが、実際に避難所生活をしている場合、要配慮避難者が誰であるかを把握するうえで、重要な情報である。避難所に滞在している間は、受付テントに氏名札を掲示しておいたほうがよいのではないかと、との意見があった。

また、受付という役割について、初期対応として大変重要である一方、受付が無事終了後は特別に何かすることがあるわけではない。そのため担当した学生が、手持無沙汰となる様子が見受けられた。担当となった役割を無事に終えた後、他の班の動向確認や必要に応じて応援に回るなどをどのようにするのか、今後の課題である。

5-3 「施設管理班」を中心とした居室づくりとアクティビティ活動

1) 段ボールベッドの作成

保有している段ボールベッドは主に2種類ある。使用においては大差ないが、作成する場合の手順が大きく異なり、構造が複雑なものと比較的安易なものがある。構造が複雑な段ボールベッドの作成に時間を要してしまった。段ボールベッドは日常的に作成するものではなく、むしろ非常時に初めて作成するケースが多いと思われる。段ボールベッドは、使用する人が使用しやすいことが第一ではあるが、同時に誰でも比較的簡単に作成できることも重要である（写真7）。



写真7 訓練1

2) 居室づくり

居室づくりをする部屋によっては、大切な教材（電子ピアノ）が保管されているところもあった。そのため、このようなものが置かれている部屋を居室とすることが適切なのか、あるいはこのような教材を移動する場合、どこへ移動するのか、今後の課題である。

また、居室づくりは床の清掃などをしてから実施する手順であったが、清掃をせずに居室づくりをしてしまった部屋があったことは反省点である。

3) アクティビティ活動

前回同様、昼食前後の時間はしばらくの空き時間がある。空き時間の使い方、過ごし方は自由であるが、過去の災害時では、長期化する避難所生活において、体を動かさずにじっとしていることによるエ



写真8 訓練2

コノミークラス症候群で体調不良になる人や亡くなる人がいた。そのことから、体を少しでも動かしてもらうことが必要であり、その機会としてアクティビティ活動を実施した。

今回、一部の居室では東京五輪音頭2020の映像を流して一緒に踊る試みをした（写真8）。要配慮避難者の中には楽しそうに一緒に踊る人もいれば、音に敏感なためか気持ちが落ち着かなくなる方もいた。改めて、要配慮避難者の状態に合わせてアクティビティ活動を実施することが基本であることを確認した。数日間続く避難所生活の何もしないでいる時間の過ごし方に気を配ることは大切な視点の一つであろう。

5-4 「食料物資班」による食事の準備

1) 避難食の搬入と受け取り

本学の備蓄品だけでなく、前回同様に若葉区から避難食（アルファ米）及び飲料水の提供をしていただいたものを利用した。

前は訓練前日までに避難食を搬入してもらっていたが、今回は訓練当日9:00頃に搬入してもらった。特別に混乱もなく受け渡しをすることができた。

2) 調理と提供

前回同様に作成手順を確認し、アルファ米と豚汁を調理し提供した（写真9）。

アルファ米は1袋ごとに水を入れて作成するが、調理する袋の数が多いためか、袋ごとの水の加減や作成手順の違いに多少の誤差が生じてしまうことがあり、仕上がりの状態に違いが生じてしまうことが



写真9 訓練3

今後の課題である。

また、嚥下や咀嚼が十分でない高齢者にとっては、アルファ米が硬いということもあり、水の加減やその他の工夫で軟らかく仕上げるができるのかなどを試していくことが必要である。

食事の配給について、支援をする学生がすべてをするのではなく、食事の受け取りなど要配慮避難者ができることはしてもらうことも、数日を過ごす避難所生活では必要ではないかという意見もあった。要配慮避難者自らが食事を受け取りに来る場合の手順や流れの在り方についても今後の検討課題である。

5-5 「保健衛生班」による健康管理等

今回、バイタルチェックを保健医療学部理学療法学科（以下、理学科）の学生に実施してもらった。

理学科の学生の参加は、午前と午後とで参加する学生が異なることから、昼食を挟んで計2回のバイタルチェックを実施した。

要配慮避難者のバイタルチェックでは、一部計測が困難な方もいたが、概ね計測出来た様子であった。

理学科学生にとっては訓練の参加が今回初めてである中、バイタルチェックという役割を学生は責任を持って取り組むことができた様子であった。しかし一方で、バイタルチェック以外の要配慮避難者とのかわりにおいては、やや戸惑いや躊躇をしていた様子も散見され、積極的なかわりとまではいかなかったように思われる。

訓練においては、主に地域介護福祉専攻の学生が取り組みを支えているが、実際の避難所生活を支えるに際しては、より多くの人、さまざまな学部、専

攻の学生の力が必要となる。

今回の訓練では、理学科の学生において午前と午後とで支援する学生が入れ替わったが、そのことで引き継ぎや連絡が十分に行き届かなかった側面もあった。

実際の避難所生活では支援する人が交代することは必ず起こる。そのための引き継ぎや連絡のあり方は今後の課題の一つである。

5-6 その他

以下、今回の訓練での気づき、反省点、今後への不安などを箇条書きにて記す。

- ・朝、学生が集まった際の点呼確認が必要。
- ・要配慮避難者の受け入れ完了報告が必要。
- ・施設管理班からの受け入れ準備完了報告が必要。
- ・要配慮避難者を居室に受け入れ後、居室担当者は入居者の氏名を書いて居室扉に掲示する。
- ・本部テントに誰もいなかった。誰かが待機している必要。
- ・ビブスを着ていない学生がいた。終わるまで着ていることが必要。
- ・片付けの際、自分の班や役割が終わると帰ってしまう学生がいた。他の班に合流し手伝うことが必要（施設管理班の負担が大きい。段ボールベッドの解体やエアマットのエア抜きなど）。
- ・タイムテーブルに変更がある場合の伝達方法の検討。
- ・実際に避難生活が始まった場合、1日に3食提供できるのか。
- ・教職員と学生の宿泊場所はどうするのか。
- ・教職員や学生の交代要員はどうするのか。
- ・指揮系統はどうなるのか。
- ・トイレが足りるのか（断水になれば簡易トイレが必要になる）。

6. 体験を経ての拠点福祉避難所運営訓練の学生の学び

3回目にして、地域介護福祉専攻だけでなく、専攻科特別支援教育専攻、理学科の学生が参加した。

それぞれの専攻、学部学生には訓練マニュアルとともに、前回の訓練様子を映像で見せ、訓練状態をイメージさせた。さらに合同オリエンテーションを

行い、各班の役割の行動表を提示した。すべての学生が訓練体験は初めてであり、卒業生に当日の動き、心構え等を話してもらった。各班相互の打ち合わせはしていない。

各専攻学生の主なる感想、意見を取り上げてみる。

○地域介護福祉専攻の学生の感想、意見

ア 食料物資班

- ・実際にこの訓練に参加してくれた障害者を見て、このような訓練を一度でも経験していれば、いざという時のヒントになると思った。災害時の大混乱の中、色々なタイプの障害者にどう対応してよいか戸惑った時に、今日見た訓練の様子が役立っているに違いない。
- ・仕事の内容は難しくないが、段取りが悪い。リーダーシップをとれる子もいれば、ただ指示を待つ子、全くこの訓練に無関心の子、色々いたが、リーダーシップをとれる子がもっといたら、もっとスムーズにできることがあるのと思った。
- ・今回は訓練でしたが、災害時はパニックになってしまうので、もっと情報伝達をしっかり行う必要がある。
- ・先生方準備等有難うございました。先生方が中心になっての訓練でしたが、学生たちは他人任せの印象をうけた。
- ・自分から行動できなかったのが、来年は自分から行動する。
- ・始終バタバタした訓練となってしまった。人は余裕がなくて忙しい時は他人への配慮を怠ってしまうが、障害者の方が安全で安心できる支援を常に心がけなければいけないと感じた。同時に俊敏な行動力や判断力、協調性も必要であると実感した。
- ・担当になった自分の役割をちゃんと理解し、事前にもらってあるプリントをきちんと読んで参加することが大事だと思った。

イ 施設管理班

- ・肢体不自由の方と共に過ごした。前向きに障害をとらえていた。こうして前向きに障害をみるには、いったいどのくらいの心の強さと、時間が必要なのだろうと思った。障害者だからという悲観的な視点で見ず、健常者と同じように接していきたい。

- ・障害のある人からのお話を聞いて、障害のある人でも助けることができること、手伝うことを断られても手伝いたいという思いは無くさないでほしいということを知ることができた。
- ・コミュニケーションを図ろうとしたが、先輩の盛り上げ方をみて、わたしはまだまだ足りないなと思った。
- ・知的障害の方とはコミュニケーションを取れない的な発言を何度か耳にした。コミュニケーションをとろうとしないから取れないのだと思う。
- ・開所式後、リーダーの方が的確に指示してくださり、早く必要物品を部屋にそろえることができた。居室づくりは居心地の良い空間づくりを意識した。
- ・様々な改善点を発見できた。各班に配置すべき物も、振り分けておく時間があったと思うが山積みで置いてあり、人ばかり多く無駄と混乱が多かったと思う。
- ・開設前の事前指導の説明をメモしていた。班員が皆協力的で、意識の高い人達ばかりであったためスムーズに施設設営ができた。
- ・各班に配られた箱に入っていたグッズは自分たちで用意したほうが良い。

ウ 総務班：受付

- ・様々な利用者さんや障害の方が来るので、その方にあった対応や接し方を勉強して臨むことが大切だと思った。
- ・それぞれの班のチーム連携が取れてなかったので、今後は始まる前に確認しあうのがとても重要だと思った。
- ・障害をもっている方と直接触れ合うことができ、支援をどこまでするかは、人それぞれだということを実際感じ、確認することができた。

○特別支援教育専攻の学生の感想、意見

- ・今回、スタッフとして参加して、コミュニケーションの重要性を知った。
- ・知的障害者対応を行った。焦らず、利用者さんのペースで調子をみて無理にやらず、様子を見ながら対応することが大切だと思った。
- ・黒板等にタイムテーブルを簡単に書くと、見通し

を持って、混乱が少なく済むと思う。

- ・要配慮者の方々は身体がきかない、音にすごく敏感であるなど、様々な特質をかかえている。「避難時だから仕方ない」と諦めるのではなく、なるべく音の響かない場所に案内したり、車椅子でも使えるスペースを確保したり、不安そうな方に話しかけたりなど少しでも快適に過ごせる工夫が大切だと思う。

○保健医療学部の学生の感想、意見

ア 保健衛生班（バイタル測定が主）

- ・視覚障害者の方にこれから何を測るのか、どのように測るのかを説明することの難しさを実感したと共に、他の障害をお持ちの方への対応の方法を考えるようになった。
- ・今回の訓練では他学部との連携も学ぶことができた。私たち保健医療学部はバイタルチェックはできるが、短大の学生のように上手に誘導することはできない。両学部があることが植草学園大学が避難場所として指定されている理由だと考えた。
- ・今回のようなボランティアがあるならば参加したい。
- ・まず初めにベッドの組み立て作業をした。組み立て作業は時間がかかり苦勞した。
実際に患者さんの血圧測定や脈拍数などのバイタルチェックをした。この訓練は私にとって非常に良い経験となった。自分の担当以外にも、テントの設営や椅子の移動等、他のスタッフの手伝いの出来たので良かったと思う。昼ご飯はアルファ米を初めて食べた。
- ・この訓練にすごく力を注いでいるのだなと改めて感じた。この訓練をこれからの自分の何かに役立てていければいいなと考えた。
- ・改善してほしいのは患者さんの人数が少なく、やることが終わって何もやることのない時間が多くあった。

イ 総務班：一次避難所班

- ・避難者カードを書くことのできない方の代筆、視覚・聴覚に障害を持つ人に受付までの案内を行った。一次避難所にたくさん人が集まって大変だった。参加者は楽しそうだった。手話通訳に驚いた。視覚障害者の案内は安全管理という面で学び

が多くあった。

- ・今回参加して大事だと思ったのは、気づいて行動していくことだった。これはどんな場でも重要なことだと思うので今後に生かしていきたい。
- ・トイレがセンサータイプであったので、視覚障害者の方は大変そうだった。「実際の避難時に電気が止まるとだめね」と言っていた。確かにそうだと気付かされた。
- ・このような経験は学生だからこそできることだと思うので貴重な時間だった。
- ・午後からのスタッフだったが、特に仕事がなく、いる意味がないと思った。引継ぎをしても全体像がつかめないので、やるんだったら1日通しのほうが良いと思う。

ウ 食料物資班

- ・最初は周りとの連携ができていなかった。的確に迅速な行動をとるために、効率的に行うとよいと思った。本当に災害があった時にはいかに早く行動できるかを考えて行うことが大事だと思った。
- ・高校まで避難訓練をやっていたが、拠点の福祉避難所での訓練は行ったことがないので新鮮だった。班の仲間で協力して物事を行うことが大切だと感じた。

上記のように学部、専攻、専攻科そしてその担当班によって感じるものが異なる。

まとめると、大きな学びは、協力してくださった障害者の皆さんとのふれあいから得たことは全員有意義に感じていた。また先輩学生、社会人学生の様子をみて自分の現在の力不足を感じている学生もいた。他学部の学生との共同作業に対しては不満の意見が多かった。

理学科の学生は午前、午後と分かれていたことや、避難してくる対象者が少ないなどの訓練状況設定に対する不満の訴えがあった。バイタルを測るという役割だけでなく同室の施設設営や他班の手伝いを自主的に行っていた学生は学びに訓練の意義まで踏み込んでいた。

参加したその学生がどれだけ、主体的に自分の役割に取り組むかによっては、当然学びも異なるし、事前指導が同じであっても主体的になれなかった学生は不満の形で、自分たちが運営の中心と考えた学

生は自分の問題ととらえて対応しているのがわかる学びであった。

7. 新たな課題

7-1 避難所開設についての課題

2年ぶりとなった拠点福祉避難所開設・運営訓練は、学生全員が未経験者であるにもかかわらず、各自が分担する役割を果たし、ほぼ計画通りに実施することができた。このことは、過去の実践を元に作成した「運営マニュアル」に集約・蓄積された手順や方法等の妥当性が、一定程度証明されたものととらえることができる。今後、実際の大規模災害時に即応できるよう、より実践的な体制を整備していくため、以下の課題等について対策を講じていく必要がある。

① 避難所開設要請等の連絡体制の確立

拠点福祉避難所開設の起点となる千葉市との連絡体制が未定であったため、今回の訓練では、拠点福祉避難所開設要請の本部となる市要配慮者支援班（千葉市障害者自立支援課）と災害対策本部が設置される若葉区（くらし安心室）、そして本学との三者の連絡系統を具体的に検討し、電話とメールにより実践した。また、若葉区災害対策本部からの食料移送を模した備蓄品（アルファ米及び飲料水）の受領を訓練当日朝に行い、より実践的な連携体制の確認を行った。今後の訓練等を通して、今回の連絡・連携体制の定着を図る必要がある。また、市から要請されて受け入れた要配慮者の動向について、市への報告は必要ないのか（現段階では想定されていない）等、連絡体制の未定部分についても明らかにしていく必要がある。

② 拠点福祉避難所の全学的運営体制の整備

これまで、短大の共同研究として避難所運営訓練等に取り組んできたが、今後、継続的に訓練等に取り組むためには、全学的な体制作りを進めていく必要がある。一例として、大学・短大共通の「避難所運営委員会」の設置等を検討し、平常時の訓練だけでなく、実際の災害時にも避難所運営の中核として機能する組織体制を作ることが肝要と考える。その中で、学生ボランティアの確保策をはじめ、教職員の役割分担、教職員・学生への連絡体制、施設の活用方法等を具体的に検討し、災害に対する実践的な

備えを準備していく必要がある。

③ より実践的な要配慮者支援のあり方の検討

拠点福祉避難所の開設期間は原則7日間であるが、比較的長期にわたることが想定される。当然ながら、教職員・学生も交代しながら要配慮者を支援することになり、支援に必要とされる要配慮者に関する情報を集約・共有する体制を作る必要がある。これまでの訓練で行われてきたバイタルチェックによる健康状態をはじめ、食事やコミュニケーション等日常生活面での留意事項等について、情報を集約する仕組みを検討し、訓練等で実践していく必要がある。また、要配慮者自身にできること（食事の受け取り等）があれば、できるかぎり任せる（補助的支援は必要としても）方向で支援内容・方法を再度見直すなど、長期にわたる支援を想定し、要配慮者・支援者双方にとって、有益な関わり方を検討していく必要がある。

7-2 教育的課題

今回、学園全体としての取り組みの形で、支援者役を地域介護福祉専攻だけでなく他専攻や大学の理学科の学生、総勢87名に対して要配慮者35名（介助者12名含む）で訓練を行った。さらに今回は千葉市、若葉区と本学で開設訓練も実施した

前述したように事前オリエンテーションとして訓練マニュアルの配布と共に、前回の訓練様子を映像で見せイメージさせた。さらに10月のはじめに合同オリエンテーションを行い、各班の役割の行動表を提示した。すべての学生が訓練体験は初めてであり、卒業生に当日の動き、心構え等を話してもらった。しかし、各班相互の打ち合わせはしていない。

地域介護福祉専攻の学生は、前期に科目「災害・緊急時の介護」を8コマ学習している。そして地域介護福祉専攻の学生には開設にあつたてのメール連絡を行った。

前年あげた課題1.「要配慮者に対する対応能力を高める」に関しては視覚障害者とのボウリング大会を継続したのちでの訓練であり、2年生はそれに加えワークホーム祭りも経験した。その結果落ち着いて、積極的に関わることができた様子であった。また課題2.「避難所での時間の過ごし方」についても東京オリンピックの踊りや散歩や話し合いなど

工夫が見られた。

今回は次の2点を課題とあげる。

1) いかに学生の訓練に対する主体性を引き出すか。

参加した学生が全員初めての運営訓練であったが、専攻、学部への訓練に対する思いの温度差は大きかった。

地域介護福祉専攻の学生は、オリエンテーションしてくれているのも先輩であり、科目「災害・緊急時の介護」の授業に位置づけられていることもあり、参加の意識は自分達が運営するという気持ちが強かった。他専攻、学部の学生はボランティア活動の一環と捉えていたのではないと思われる。これは計画の段階からその懸念があった。

専攻科特別支援教育専攻も理学療法学科も初めての参加であり、指導される先生も実際活動は初めてであり、ご苦労されたと思う。その点に関して、合同オリエンテーションの持ち方など反省すべき点が多くある。

いずれにしても、全学的な催しということ達成するためには、行事との位置付けのみでは無理があり、参加学生のカリキュラムに反映させていかなければ真の意味で学生の主体性は引き出しにくい。さらに実施にあたっての準備段階でいかに学生を引き込むか、しっかりと教育計画が必要に思う。

2) 訓練場面をいかにリアル設定にできるか。

今回、全学的な行事にするにしては、支援学生と支援を受ける障害者の数のバランスが悪かった。学生の学びにもあったように時間をもてあまして大学生の姿に対し地域介護福祉専攻の学生からは、批判があった。午前午後に分けての参加体制をとり、限られた内容でのオリエンテーションを受けた大学生では違いが出るのも当然の結果と言えよう。

全学が行うのには規模的に限界があり、変則的な参加体制をとらざるを得なかった。また物資の面でもおそらくは災害時には調達できないであろ

う材料を使つての豚汁提供など食事援助を行っている。また一次避難所からのトリアージ、二次避難所への移動、二次避難所での生活と共に仮設や保険手続きなど相談業務など種々の支援行動が予想されるが一部しか検討していない。諸々を分析して発災後の避難所の一連の流れが学生に理解でき、訓練できるようにすること。また協力してくださる障害者の方を増やすか、検討が必要である。

8. 終わりに

一年間は、訓練を休んで、初の大学生参加の試みは、種々の課題はあったものの全学的な行事に成る第一歩だった。協力して下さった専攻科、そして保健医療学部の先生方に感謝したい。参加した多くの学生は、この体験を通し、連携や対象者理解など学んでいる。

学園の社会的貢献として、しっかりと根付くことを希望したい。

この研究は植草学園短期大学の共同研究費によって行われた。ここに謝意を表する。

参考文献

- 1) 布施ほか (2013)「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業—産学共同による学生の社会的・職業的自立を促す教育開発」植草学園短期大学紀要第14号 P. 1-11
- 2) 布施ほか (2014)「本学における防災・減災教育の取り組み(その2)—災害・緊急時の専門力・人間力の育成—」植草学園短期大学紀要第15号 P. 1-4
- 3) 布施ほか (2015)「本学における防災・減災教育の取り組み(その3)—災害・緊急時の専門力・人間力の育成—」植草学園短期大学紀要第16号 P. 9-14
- 4) 高倉ほか (2016)「本学における防災・減災教育の取り組み(その4)—災害・緊急時の専門力・人間力の育成—」植草学園短期大学紀要第17号 P. 11-18
- 5) 清宮ほか (2017)「本学における防災・減災教育の取り組み(その5)—災害・緊急時の専門力・人間力の育成—」植草学園短期大学紀要第18号 P. 17-28
- 6) 布施ほか (2018)「本学における防災・減災教育の取り組み(その6)—災害・緊急時の専門力・人間力の育成—」植草学園短期大学紀要第19-2号 P. 39-50

